

韓国近代文学研究の現況

—2000 年以後を中心に—

朴 眞淑

1. はじめに

韓国近代文学研究の現況を整理することは非常に難しい。ある研究者は、2000 年代初め、先行研究が既に多すぎるため、大学院に進学する学生の研究が困難になっていると述べたことがあるが、2018 年現在、研究の量はその当時よりさらに増加している。李光洙小説^{イ・グァンス}についての研究史を整理した論文で博士号をとったケースも登場した（ファン・ジョンヒョン『李光洙小説研究史』高麗大学博士論文、2009）。これは李光洙に限ったことではないと見られ、研究の量がどれほど増加しているかを示す端的な事例だ。周知のように研究史は論文の序論で問題提起のために書くものであり、研究史だけで書かれた論文が博士論文として認められたことは一つの衝撃だった。李光洙研究に限らず、近代文学研究の量的増加はどこから始まったのだろうか。

韓国の人文学分野は総じてそうであろうが、近代文学研究が急増した契機は、①人文学危機論、②国家の研究管理体制の開始、すなわち 1998 年学術振興財団（現・韓国研究財団）学術誌の登録制度の開始、③研究費支援事業の実施——1999 年に始まった BK21 事業（Brain Korea 21 Project、頭脳韓国 21 支援事業）、2007 年に始まった HK 事業（Humanities Korea Project）——だ¹。もちろん、同事業が成果を生み出して人文学分野の研究に活況をもたらした面は無視できないが、論文数という計量化された評価制度のために研究業績を多く生産せざるを得なくなった。研究者のこのような“論文機械化”は国家の研究支援事業の結果生じた副作用とみられるが、他方では多くの人文学アジェンダを生

1 金大中大統領期に、世界レベルの大学院中心の大学や特性化された地域優秀大学を育成するために BK21 事業が施行されることになった際、人文学界では論争が広がった。論争の末、ある大学は同事業に参加し、ある大学は参加しなかった。同事業に参加した大学に“研究費”という名の資本が投入された結果、研究の量的な成長とともに学界の地形図は変わった。2007 年に HK 事業が始まると、大学はもちろん研究者たちも、この事業に選定されるためにこぞって参加するようになった。

むことになり、人文学各分野の研究を推し進めた。韓国近代文学、特に小説分野は、このような環境の中で研究を蓄積してきた。

したがって、本稿はこのような韓国近代文学研究の環境を前提にして考えるしかない。2000年以後の近代文学研究の現況を体系的に整理することは不可能であり、筆者の本論考は、氷山の一角に過ぎないかもしれない。筆者は2000年以後、このような状況と研究に対する省察に基づいて韓国近代小説分野に関する研究の特徴的な点を主観的に捉えて整理したいと考えている。

2. 韓国近代小説の研究現況

(1) 文化論的研究の発生と拡張

1989年、越北作家の作品に対する解禁が行われた後、越北作家に関する研究は1980年代の社会運動の時代精神と出会って非常に活発に行われるようになった。1980年代の労働文学とリアリズムの興盛のなかで、1930年代のリアリズムとともにモダニズムに関する研究も同時に行われたが、これはモダニズム作家が越北作家だったため自然に行われた研究だった。リアリズムとモダニズム研究は1990年代まで韓国文学の主流研究として進められ、研究者は、今ここにいない越北作家に関する研究に邁進した。越北作家を中心とした研究は、その成果にもかかわらず、今後の研究では批判あるいは克服の対象になるだろう。それは実際のところ、韓国近代文学史をモダニズムとリアリズムという還元論的構図によって再編するのは困難であるという判断に基づくものである。

このような状況下、1990年代以後の韓国近代文学界では、大衆文化、風俗、日常、文化制度、受容者、ジェンダーなどに関する論議が行われ、それを通じて韓国文学の近代性を再び究明しようとする流れが生まれた。この議論は2000年頃に出版された二つの研究、すなわちイム・ジヒョンの『私たちの中のファシズム』（サムイン、2000）とキム・ジンギョン他著『近代主体と植民地規律権力』（文化科学史、2003）に負うところが多い。歴史学と社会学の分野で提起された両研究は、文学研究の次の段階の研究を助ける力になったのかも知れない。

ここで論じようとする文化論的研究²は、1990年代後半以降、韓国近代文学界に新しく登場した研究傾向である。それは、近代の克服のために近代性その

2 この分野の研究をどのような用語で表すか自体についても意見が分かれるが、ここでは「文化論的研究」を用いることとする。

ものに対する探索を自らの課題として設定し、理論よりは資料により同時代の感覚を通じて再構成し提示しようとする意志の所産だと言っても過言ではない。こうした研究は、文学に対する本質的な問題を提起し、文学の危機に対する学界の反応を探る契機ともなった。文化論的研究は、テキストに対して伝統的な文学研究とは明らかに異なる立場をとっており、文学主義者からは、社会学のような方式でテキストを扱っているという批判を主に受けた。実際、この文化論的研究の代表格とされるチョン・ジョンファン、クォン・ボドレや、韓国史学界のイ・ギフンは3年以上、1920～30年代の多くの資料を読みながら研究成果を生み出した³。1990年代後半、文化論的研究は、“文学の文化研究への転換”と歴史学の“言語への転換”という二つの新しい流れが遭遇する地点で生まれたのである⁴。

韓国近代文学界における文化論的研究は、チョン・ジョンファンの『近代の読書』（プルン歴史、2003）と、クォン・ボドレの『恋愛の時代——1920年代初めの文化と流行』（現実文化研究、2003）、イ・ギョンフンの『兄の誕生——韓国近代文学の風俗史』（文学と知性史、2003）から始まったとみるのが一般的だ。

『近代の読書』は、著者の博士論文を大衆読者のために大胆に編集した1920～30年代の読書の文化史である。近代の知と読書の歴史を究明することと、読者を中心に文学史を再構成する作業の一環として行われたことを著者自ら明らかにしているが、実際、この研究は膨大な資料に基づいた読書文化史の最初の試みという点で評価に値する。もちろんチャ・ヘヨンが指摘しているように、この本は「〔著者〕自らしばしば引用している前田愛の『近代読者の成立』（岩波書店、1993）から、その発想と近代へのアプローチを得ている」⁵。だからといって、この本の成果を否定することはできないが、文化論的研究に対する批判の底辺には、このような背景もあるといえる。『恋愛の時代』は「1920年代前半の文化と流行」という副題が示すように、恋愛と恋愛熱という概念を中心に1920年代初頭の文化を同時代の資料に基づいて提示している。直接この著書に対する批判ではないが、チャ・ヘヨンは、クォン・ボドレの前作である『韓国

3 文化論的研究の出発そのものが学制的という点も特徴的である。

4 チョン・ジョンファン「文化論的研究の現実認識と展望」『尚虚学報』19、2007.2、38頁。

5 チャ・ヘヨン「資料の海を泳ぐ2つの方式——チョン・ジョンファン『近代の本を読むこと』プルン歴史、2003／クォン・ボドレ『恋愛の時代』現実文化研究、2003」『民族文学史研究』24、2004.3、449頁。

近代小説の起源』（召命出版、2000）が「李孝徳の『表象空間の近代』（新曜社、1996）と鈴木貞美の『日本の「文学」概念』（作品社、1998）の発想と近代へのアプローチに負うところがある』⁶として、以下のように述べている。

二人の著者だけでなく、現在近代文学を研究するほとんどの研究者にとって、最近の多様な日本近代史研究の成果は、明らかに新しい可能性と突破口を提供している。そしてこのような現象そのものは、国粹主義的な見方によって排他視すべき性質のものでもないだろう。むしろ日本と韓国の近代が結んでいる「非常に明らかな連関関係」を考えると、他の理論的典拠——例えば、チョン・ジョンファンの場合、マンガエルやシャルティエなどの著書——よりもっと生産的だろう。しかし、ここでの問題は、大部分の参照の方向が「日本近代史研究の発想及び方法論と韓国近代の資料」という関係設定から成っているということだ。これは最近韓国で生産されている近代史研究における「資料と研究との間の境界と分裂」、「研究への欲望と結果の解体化傾向」と無関係ではなさそうだ。⁷

チャ・ヘヨンのこのような指摘は、韓国の近代文学研究者なら誰しも深く考えてみるべき重要な問題だが、だからと言ってチョン・ジョンファンとクォン・ボドレの実証的作業に基づいた研究成果の意味を過小評価する必要はないと思う。彼らに対しては省察的自意識の存在可否、特別な理論的準拠不足、実証主義に埋没している⁸などの批判があるが、この二つの研究の影響力は、国文学界ではなお続いており後続の研究も現れている。個別に研究する研究者とは違って、彼らの研究は常に集団的であり議論を主軸にしているために、関心が集中したことも見落とせない。

文化論的研究に対する様々な批判にもかかわらず、引き続き研究は広がっていったが、その成果として、クォン・ボドレ、チョン・ジョンファン『1960年を問う——朴正熙時代の文化政治と知性』（千年の想像、2012）、チョン・ジョンファン、ソ・ヨンヒョン、イム・テフン他『文学史以後の文学史——韓国現代

6 同上、449-50頁。

7 同上、450頁。

8 パク・ホンホ「文化研究の批判的な省察——“文化研究”の政治性と歴史性：近代文学研究の現況と反省」『民族文化研究』53、2010、162頁。

文学史の解体と再構成』（プルン歴史、2013）がある。『1960年を問う——朴正熙時代の文化政治と知性』の筆者たちは、1960年に作られた制度と精神が、1960年以降、韓国の知性史と文学分野の新しい出発点となり、それがまだ生きていると考える。同書は、1960年の意味を、文化政治と知性という観点で探索したものである。そして、文学史は再び書かれうるかという問いとともに、詩・小説中心の主流文学史に反旗を翻して書かれた『文学史以後の文学史』は、副題のとおり、韓国現代文学史を解体し再構成することを提案する。この挑発は『文学を壊す文学たち』（クォン・ボドレ他、民音社、2018）に至ると、2018年の韓国社会における“MeToo”現象とともに運動としての性格がさらに強くなっている。

私たちが探求したかったのは既存の韓国文学（史）で「文学的なもの」と「非文学的なもの」、「男性的なもの」と「女性的なもの」、「政治的なもの」と「非政治的なもの」などを分ける規律が構成される原理だった。その原理が女性と性的少数者をはじめとする他者（性）に対するある種の排除と位階化を経由・承認することで成立してきたものであれば、新しい世代の文学主体によって到来する新たな「文学（性）」はそうした古くて非民主的な想像力を繰り返さないことを願った。⁹

同研究も、『文学史以後の文学史』がプルン歴史アカデミーで2011年11月末から講座後に出版されたように、2017年「フェミニスト視覚で読む韓国現代文学史」という講座の後に出版されたものだ。この本は上述の引用で提示されているように、フェミニズム的感受性と問題意識をもとに文学を再度読まなければならないという立場から、既存の文学を「壊す」文学の出発を告げる信号弾のようなものだ。これまで男性中心的に構成されて評価されてきた方式から脱却し、フェミニズムの視点で文学を解釈し評価する方法が必要であり、それを実現しようとしたものである。女性研究者の批評的自己決定権の宣言とも言えるこの研究は、多少荒削りだが、女性文学学会の業績を土台とした研究であり、次なる研究が待たれている。

1980年代の運動としての文学が、作品創作や批評を通じて行われたとすれ

9 クォン・ボドレ他『文学を壊す文学たち』民音社、2018、9頁。

ば、1990年代後半に始まったこの一連の文化論的研究は、実は、文学研究者による運動としての文学であると言っても過言ではない。彼らがテキストを扱う方法に絶えず問題を提起しつつ韓国社会の変化とともに歩もうとする鋭い問題意識のため、彼らの研究が発揮している力は無視できない。

一方、文化論的研究に属しながら学際的研究の一例を示した検閲研究会について言及する必要がある。検閲研究会は、国文学分野の韓基炯（ハン・ギヒョン、成均館大学）、韓萬洙（ハン・マンズ、東国大学）、朴憲浩（パク・ホンホ、高麗大学）、東アジア言語文明学分野の崔敬姫（チェ・キョンヒ、シカゴ大学）、社会学分野の鄭根植（チョン・グンシク、ソウル大学）などが、純粋に検閲問題に関する学問的関心から始めた研究会だ。周知の通り、検閲研究は植民地文学研究はもちろん、植民地知識史と思想史の問題を扱う上で欠かせない課題だ。これまで様々な制約から、検閲がどのように行われたのか制度的実態や意味が具体的に解明されたことはなかった。パク・ホンホは検閲研究の成果と展望について次のように述べている。

検閲研究は、われわれがいまだに「朝鮮総督府」に対してさえ、全面的な知識を持っていないことを教えてくれたが、「朝鮮総督府研究」とは一研究者、一分野の研究だけでは成り立たない。検閲研究に限っても、検閲が与えた社会的規律の範囲と影響は広範なものであるため、必然的に学際間の研究が求められることになる。「検閲研究会」の第二次学術大会で、法、新聞放送、映画などの分野を取り上げたのは必然的なことだった。〔中略〕例えば、「植民地文化制度史学」あるいは「植民地学」という上位概念を提示し、これを具体化するための学際間研究が組織できる。研究者の共同研究により、一次的には植民地朝鮮における様々な文化領域を対象として現実を形式化する前提としての制度と、そうした制度が精神に与えた影響という問題を模索することができる。さらに世界中の2/3以上が植民地を経由して近代になったことを考慮すると、個別国家の植民地的特殊性を含む「植民地論」を構想することができる。¹⁰

10 パク・ホンホ「‘文学’‘史’がない時代の文学研究——韓国近代文学研究に対するある所感」『歴史批評』2006年夏号、109-111頁。

検閲研究の成果は、検閲研究会編『植民地検閲——制度・テキスト・実践』（召命出版、2011）、ハン・マンズ『許された不穏——植民地時代の検閲と韓国文学』（召命出版、2015）と、チョン・グンシク他『検閲の帝国』（プルン歴史、2016）として出版された。特にハン・マンズの著作は韓国近代文学界に新たな覚醒の機会を提供している。ハン・マンズは検閲研究を通じて、「作家が「書こうとしたこと」は何であり、「書けたこと」、「書けなかったこと」、「書くべきだったこと」、「書こうとしたこと」の間の緻密な比較、対照、類推の過程を通じて、読解・解釈・評価する作業が行われなければならない」と強調した。実際、彼はテキスト内の検閲の様態を調べ、テキスト解釈を一層精密にすることにも貢献した。

近代文学界内部で「文化研究」と称される様々な学問的試みは、他の分野を「侵攻」し、「内破」したと言ったパク・ホンホの表現を借りて整理すると、文化研究は「文学研究ではなく社会学ではないかとされるような境界を行き来する研究」であり、「実感としての近代を復元しようとする流れと近代における主体形成メカニズムを追究しようとする流れを取り込んだ」研究だと言われる。チャ・ヘヨンはこれを「人文学研究の危機と選択」という言葉で表現しており、いかなる評価を受けているにしても、韓国近代文学研究において文化論的研究が一定の流れと影響力を持っていることは間違いない。

(2) テキストへの帰還

文学研究と文化論的研究の最も大きな違いは、テキストを扱う方法にあると述べた。文化論的研究が韓国の近代文学学界を「内破」しているという意味は、文化論的研究が「テキストあるいは文学自体を括弧で括ろうとする」からだ。文学研究者が文学テキストを分析したり解釈したりせず、社会学で扱う資料のように扱うなら、彼らが文学研究者なのかという質問が当然起こってくる。

リュ・ボソンは「だから問題は文学だ——最近の文化研究に対する批判的ないくつかの提言」で文化研究の意味を次のように書いている。

厳しい実証的作業を通じて、文化研究は恋愛の時代、大衆知性論、自殺論、スパイ論、スポーツ論、銃後婦人論、青年論、南方をめぐる議論、『開闢』などの雑誌、検閲、核問題、翻訳と翻案、比較文学、映画の影響、満州論、浮浪青年、風紀紊乱者、お手伝いさんの文学史、モダンガール、ア

プレゲール、ジェンダー論、探偵小説など、過去あまり注目されなかった議論を、韓国の文化史の主要トピックスとして説得力をもって召還し、これを通じて韓国文学研究がこれまで多くの社会文化的コンテクストを排除したまま、文学（作品）を読んできたかを如実に証明した。¹¹

リュ・ボソンは、文化論的研究の成果によって従来の韓国文学（作品）分析が、あまりにも多くの社会文化的コンテクストを排除したまま作品を読んできたかを認めながらも「問題は再び文学だ」と主張する。文化論的研究の成果は、テキストを分析する別の視座を育てる土台としての役割を果たしたことにあるといえる。2000年以後のテキストを取り扱った研究のうち、文化論的研究成果が成し遂げた風俗論と同時代の社会風景に基づく精密な作品分析がなされたが、これは文化論的研究の間接的な波紋と言える。そのような意味で、リュ・ボソンが主張する「文学なき文化研究」から「文化ある文学研究」あるいは「文学ある文化研究」へとその中心を移さなければならず、文学の地位に対する真剣な考古学的な探査の上に、研究者自身が関心を持つ文化領域についての研究を比較、対照、類推する時にこそ、文化研究は、既存の象徴秩序を解体する文化研究本来の目的に到達できる¹²という判断は適切なものである。無論リュ・ボソンは文化ある文学研究、文学ある文化研究がどのような形になるのかについては具体的に提示していない。

筆者も「問題は再び文学」でなければならないということに同意するが、その「文化ある文学研究」、テキストへの帰還という問題意識を学会のテーマに反映させた事例をいくつか挙げてみたい。先に言及したが、韓国研究財団の登載学術誌評価制度のため、各学会は評価をもらうためにも、新しい問題意識と人文学的な見方を堅持せざるを得なかった。特に仇甫学会¹³の場合、最近になって登載候補学術誌、登載学術誌に選定されるにいたり、他の学会が企画しな

11 リュ・ボソン「だから問題は文学だ——最近の文化研究に対する批判的ないくつかの提言」『敦岩語文学』32、2017.12、138頁。

12 同上、165-66頁。

13 個別作家の名前を掲げた学会で、最も古い学会は尙虚学会だ。尙虚学会は、尙虚李泰俊（イ・テジュン）についての研究結果も収録されているが、「尙虚研究のための学会」というよりは、韓国近代文学に問題提起をするという趣旨で、文化論的研究の前線に立った学術誌である。

った個別小説テキストに関する深層討論を学会誌に掲載している。対象作品は「小説家仇甫氏の一日」、「川辺風景」、「路地裏」、チェ・インフンの「小説家仇甫氏の一日」などで、この討論から論文研究テーマに発展していった事例も生まれた。仇甫学会のこの深層読解企画は、研究者がテキストを読む具体的な経路を共有し、文学教育にも還元される土台を築く必要があるという問題意識から始まった。具体的なテキスト分析がより精密に進められるべきだと感じたからである。文学においてまだ重要なのはテキストだ。仇甫朴泰元（パク・テウォン）に関する研究は、新進研究者が参入しにくいほどの研究レベルを確保した。

春園研究学報も昨年登載候補学術誌で今年になって登載学術誌になった。春園李光洙は韓国の近代文学史でとても重要な作家であるにもかかわらず、親日行為のために学会の創立が困難で学会が創立されたのは最近である。春園全集の出版プロジェクトも、春園研究学会が出版準備委員会を發起し、遺族、出版社、研究者とともに現在進行中であり、来年出版する予定だ。特に2017年は李光洙の「無情」の発表から百周年にあたる年であり、李光洙の「無情」だけを扱う学術大会も多く企画され、研究成果も蓄積されつつあった。春園研究学会で『春園全集』出版にあたる研究者が、解説の執筆以前に先に論文として発表する場合がしばしばあり、その成果が期待される。最近、筆者は『春園全集』出版のために現代語訳をしながら精読し、「李光洙の『土』に現れた農村振興運動と同友会」（『春園研究学報』13、2018.12）という論文を書いた。これまで見逃されていた同友会の協同組合運動と安昌浩の農村振興運動が小説の構造と関わっていたことを明らかにした。これにより日帝の農村振興運動に対する李光洙の現実認識の様子も具体的に立証した。これは筆者が日本の同化政策に関心を持っていたため可能なテキスト分析だった。今やテキスト分析は、これまで蓄積されてきた個別研究者の視野の拡大により、また、文化論的研究が広がった場において、刷新されねばならない。その点で、いまや再び文学でなければならない。

個別作家研究の他にも、韓国現代小説学会は、最近、「だから問題は文学だ——最近の文化研究に対する批判的ないくつかの提言」の執筆者が、学会の会長となり、再度小説とは何か、作家とは何か、読者とは誰なのかを点検する企画を立て学術大会を開き、学術誌に掲載した。

個別研究をここで一つ一つ扱うことは難しいが、豊富なテキストをきちんと読まなければならないということの重要性を直接示す著作として、バン・ミン

ホの『日帝末期韓国文学の談論とテキスト』（イェオク、2011）が挙げられる。バン・ミンホは文学が根本的に修辞学的であるという原論的な事実を思い起こさせ、特に日帝末期の韓国文学作品を正確に読むためには、テキストの中に現れる作家の演技および偽装を考慮しなければならないということを強調している。「この本全体を貫流しているコンテクスト構成の豊かさと相互テキスト性に則った「積み重ね読み」の立体感」¹⁴は評価に値する。これは脱植民地主義の理論に基づいている。特に「専有」(Appropriation)と亀裂、混種性に注目しながら、日帝末期の対日協力とかかわるテキストの中に描かれた苦悩と迷い、^{ためら}躊躇いを読み取る著者の読解能力は卓越している。協力は演技であり、偽装された順応の裏面に隠された抵抗の契機を読み取ることこそ、文学研究が集中しなければならない作業だというのだ。このようにテキストの重要性を認識し、テキストから意味を抽出して解釈の幅を広げていく時、韓国文学史研究はさらに発展していくのではないだろうか。

3. 結 び

韓国の近代文学研究は、1989年以後本格化した越北作家研究から1990年代後半以後文化論的研究へと進んだ。2000年代初期から、文化論的研究は、批判を受けつつも拡大し、これに対して、再び文学へ戻らなければならないという声と研究も続いている。また、一方では1990年代後半の研究を振り返り、「なぜ、現在ここにいない越北作家研究を専ら行っていたのか」という問題提起をし、韓国（南韓）文学史を構築した越南文人に関するプロジェクトと研究成果も現れている。興味深いのは、起点となった越北作家の研究時期は1980年代だったが、今はその1980年代が研究対象になって研究されており、当時最も研究されたテーマ「KAPF」が再び脚光を浴びるとともに、社会主義文学についての見直しも行われているということだ。

文化論的研究によって、韓国近代文学研究が社会学、歴史学との間を往還しながら範囲を広げていることが一つの成果だと言ってよいのは明らかだ。文化論的研究の関連授業を主に受けていたある大学院生が、自嘲的に「小説が好きで文学を研究しに大学院に来たが、雑誌を読んでいたら勉強に興味を失った。

14 韓水泳「想か倫理か——日帝末の文学を認識するエピステーメー」『人文論叢』66、ソウル大学人文学研究院、2011、412頁。

この2年間、小説を正しく読んだり研究したりする方法を習ったことがない」と述べたのは多くのことを示唆している。もちろん筆者は当時、「雑誌の研究をしておけば、小説を読むのに大いに役立つ」と話した。それは当然のことだからだ。

筆者は文学（小説）研究者である。文学が人生の全分野にわたる以上、すべての学問が文学に関連していると言っても過言ではない。文化全般について考えることは、文学テキスト分析を深めるために必要な作業だ。2000年以後、韓国近代文学の研究で、文化論的研究は既存の主流研究に問題提起し、これを批判する伝統的な文学研究家にテキスト分析を深めることがより重要だという認識を持たせたことを考えれば、相互扶助的な関係にあるといえるのではないだろうか。彼らによって小説のテキストを読む方法も多様化し、刺激を与えられてきたことを思えば、これも韓国近代文学研究の推進力だったと言えよう。

ただし、「これまでの文学史が排除してきたすべてのものを、素晴らしいと言って済ませるのでなく、問題として俎上にあげる」ことで、「既存の文学史に十分に取って代わり、同時に現在の統治性を解体しうるようなものを選びとり証明する必要がある」という、『文学史以後の文学史』に対するリュ・ボソンの指摘に留意する必要がある。これは文化論的研究を主とする研究者に求めるのではなく、このような問題意識を持った他の研究者群が行うべきことではないかと思われる。

（パク ジンスク 韓国・忠北大学校 教授）